



アカハラといわれなかったために—コミュニケーション・スキル・アップの実際—



この物語の主人公月輝夫教授(仮名)は、暴言・叱責は指導上必要と考えている一人です。ただ、数人の院生がそれに耐え切れず彼の元を離れたり、うつ状態に陥ったりしたことで、少し反省もしています。でも、今日、講義中に教室から出て行くとした学生にキレてしまいました。



特定非営利活動促進法に定めるところにより、このビデオの収益はNAAHの活動および発展のための資金として役立てられます。

企画・制作  
**NPO アカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク (NAAH)**  
〒530-0044 大阪市北区東天満2丁目9-4 千代田ビル東館507号室  
TEL: 06-6353-3364 FAX: 06-6854-2930 <http://www.naah.jp>  
このビデオを、著作者の許諾無く個人的な範囲を超える使用目的でコピーすることや、営利目的での上映、レンタル、放送、ネットワーク送信をすることは、著作権法上禁止されています。

カラー 8分 制作年月日：2009年11月 カバーデザイン：Lisa Takeda

# アカハラと いわれなかったために

## コミュニケーション・スキル・アップの実際

学生や大学院生が指導教員から受けるアカデミック・ハラスメント（アカハラ）には、暴言・人格否定発言、叱責・暴力、指導放棄・拒否、長時間労働の強制、研究成果の収奪、学位取得妨害、過干渉などがあります。しかし、多くの場合、指導教員の側は、教育上の指導方法であると思い込んでいて、アカハラをしているという自覚がありません。

アカハラが学生・院生に与える精神的苦痛など負の影響を認識し、アカハラをしないために、コミュニケーション・スキルを磨くことから始めましょう。